

1957年の日本における「スプートニク事件」の社会的受容に関する一考察

——『アカハタ』を含む活字メディアの調査・分析を手がかりに

山本昭宏

本稿は、1957年10月4日にソ連が打ち上げに成功した人工衛星スプートニク1号について、日本社会がそれをいかに受け止めたのかを、メディア言説と表象の調査・分析を通して考察するものである。対象とする媒体は、全国紙は『読売新聞』と『朝日新聞』、機関誌『アカハタ』、雑誌は『思想』『中央公論』『週刊朝日』の記事を紹介・分析する。その結果明らかになった点は次の三点に整理できる。第一に「スプートニク事件」の前史として新聞社による宇宙開発への期待感の醸成があったこと。第二に人工衛星と核エネルギーの受け止め方には一定の類似性があること。第三に『アカハタ』においては、社会主義の優位性、平和勢力、未来主義、アメリカへの敵対性を繰り返し強調するという特徴があること、である。